

年間第2 1 主日

第一朗読 ヨシュア 24・1-2a、15-17、18b
第二朗読 エフェソ 5・21-32
福音朗読 ヨハネ 6・60-69

2024.8.25 9:30 ミサ
カトリック高円寺教会
主任司祭 高木健次神父

今日の第二朗読はエフェソの教会への手紙が朗読されましたけども、その中で、パウロは夫婦の関係について語っていました。そして、その夫婦が互いに愛し合うこと、それはキリストと教会の関係を表わす、その神秘的なのだというふうに結論付けているんです。神様と人類、またキリストと教会、その関係を表わす人間関係の頂点が夫婦の結びつきなんだというふうに、このエフェソの教会への手紙から言われるわけなんです。

わたしも、司祭をやらせていただいている、いろいろな場面で、「ああ、ご夫婦の結びつきというのはほんとに神様の恵み、というか神秘的なんだなあ」と感じることがあります。結婚式のときに感じるということはあんまりないと言うと変ですけども、むしろお葬式の時なんかがそうです。人生の途中から出会った人なのに、生涯をずうっと一緒に過ごして、そしてご伴侶をこの世から送るときにはほんとに自分の一部、部分が失われたかのような悲しみの中で送るっていう、そこまでのつながりが形作られてきた歩みというのは、どんな結婚でもそのようになるというわけではない、しかし、そのような歩みとして生涯を完成されるときにはまさに神様の恵みの一つのしるしとして用いられたというふうに感じられるわけです。ほんとに「不思議だなあ」と思うわけです。

そのように、相手がどうなっても、どのような者であっても最後までともにいるというその関係は、今日の福音の中では多くの人が離れ去った中で弟子たちが——ペトロが代表して、「あなたをおいてだれのところに行きましょう。わたしたちは離れ去りません」（ヨハネ 6・68）と言っている、そういう言葉の中にも表われている。つまりは、ご夫婦の関係だけではなくて、人と人が相手がどのような者であっても見捨てることがないというつながりの中に神様の恵みを見出すことができます。

先回りして言うならば、実は、ペトロたちはこういうふうに言っていたけれど、イエス様のもとから逃げてしまいます。でも、本当に「あなたをおいてだれのところに行きましょう。わたしたちはあなたから離れ去ることはない」ということをその生き方で示してくださったのは、イエス様のほうだということが、ヨハネの福音書はあとで明らかになってきます。だから、神様のわたしたちへの関わ

りは決して失われることがないんだってということが、イエス様の弟子たちへの態度の中に示されることになります。

一方で、今日の福音ではもう一つ別のタイプの関わり方が登場してきました。それは「多くの人たち」です。イエス様のもとで多くの人はずかかなパンで満腹した、その特別な奇跡をもう一度行ってほしいと思ってイエス様のもとに集まって来た人々は、イエス様がそれをしてくれないということが分かって、そしてご自分が天からのパンであるという、人々からすれば訳の分からないことを話さだしているという中で、自分たちの期待に応えてくれないことが明らかになって、多くの人々が離れて行った。そういうふうなことが今日の福音で出て来るわけですが、自分の思い通りに相手が動いてくれるならばその人のところに行く、そうでなければ離れ去りますっていう、自分の都合を基準として相手とつながるのか、関わるのか、それとも離れるのか、見捨てるのかということを決めていく、そういう人間関係のあり方が、「あなたをおいてだれのところに行きましょう。あなたから離れ去ることは決してない」とペトロが口では言う、でも実際にはイエス様はその生き方を通して示して下さった関わり方との好対照、と言いますか、二つのタイプ、相反するかかわり方——自分の都合を基準にして、相手が自分の思い通りになるならば関わる、そうでないならば離れる、あるいは、どのような場合でも、思い通りになったとしてもそうでなくてもともにいるっていう、この両極端と言いましょうか、が示されています。わたしたちはどちらなのかということをお問われているようにも思います。

神様のつながり方が「決して見捨てない」とするならば、神様から離れた人間の関わり方——その中心に神がいないならば、中心は自分の都合ということになって、自分の都合によって関わるか関わらないかを決めるっていう、神から離れた人間の現実と言うことができると思います——か、それとも神とともにある、その恵みを生きるのかという対照が示されていると言っていると思います。

でも、わたしたちは周りの人たちとのつながりの中で、イエス様のようにどんな場合でも自分を離れないでともにいてくれる人たちに出会っているならば、それは本当に感謝です——たとえ相手が信者であろうとなかろうとのつながりですよ。そしてまた一方で、わたしたちがすべての人に同じようにはできないとしても、この人に対して神様の関わり方を示して欲しいとして神様から託された人は誰であるのかということをお改めて考えてみる、そしてほんとにそういうつながりを育もうとしているかなということをお振り返ってみることは大切なような気がします。あるいは、多くの人がお自分から離れて行かないように、多くの人から受け入れられるように、周りの人の期待に応えなければ、ということだけに心血を注いでいて、そうではない、自分がどのような者であってもともに歩んでくれている人とのつながりをないがしろにしている、あるいはそこからほんとの力を得ることができるのに、そのつながりを忘れてしまっははいないかなあということも考えたいと思います。

でも、考えてみたら自分の周りにはどんなときにも自分から離れないでともにいてくれる人っていないんだってという方もいらっしゃるかもしれません。そういうときには、自分からそのような関わりを始めていこう、そこから神の国が出發して行く、そのように務めることを通して、神様はきっとおなじように大切にし合う出会いを備えてくださるのではないかと思います。自分の方が損得で周りの人を判断していくという考え方の中にいながら、自分はどんなときにもともにいてくれる人を探し求めているというのは、もしかしたら無理なことかもしれません。同じような人のところに同じような人が集まって来きますから。

ペトロはイエス様に対して「あなたをおいてだれのところに行きましょう。決して離れることはありません」って言いましたけども、実際はイエス様のほうが離れることがなくて、そしてそのイエス様の心に完全に出会い、聖霊をいただいたときに自分もそのようなイエス様のつながり、イエス様の間関係のもち方を自分たちもできるように変えられていくというのが、福音が伝えていることです。

わたしたちも、いつもともにいてくださるイエス様との関係を深めることを通して、他の人との間に損得を超えたほんとのつながりを生きることができるように変えられていくのだと思います。神様に対して、自分の思い通りにしてくれるときには「信じます」、そうでなければ「神はいない」っていうようなつながりを生きていて、人間同士だけいつもともにいるっていうことはできないのではないのでしょうか。わたしたちは神様とのつながりを生きる中で、人とのつながりを生きていけるんだと思います。

今日わたしたちはこのごミサを通して、今日も一人ひとりの心の中にお迎えしようとしているイエス様の心をいただいて、そして一人ひとりが他の人とのようにかかわっているのかということを出しながら、わたしたちの周りに神の国——互いに見捨てることのない恵みの関係が育まれていく、その希望のうちに、このごミサを通して神様の助けをいただきたいと思います。

ミサ説教はカトリック高円寺教会ホームページの「ミサ説教」のページにも掲載されています。

PC <http://www.koenji-catholic.jp/cgi-bin/wiki/wiki.cgi>

携帯 <http://www.koenji-catholic.jp/mobile/>